

◆ かつば民話シリーズ⑭ ◆

かつばのなみだ③



作:近藤せいけん



太郎が荷車を引き、しげとゆうが後ろから荷車を押して、厚木の町の市場に着いた。町に入ると太郎はキョロ、キョロ物珍しそうに、あっちこっちを見回していた。太郎にとって、人間になって初めての、たくさんの人を見る機会であった。緊張と面白さとうれしさと興奮していた。

「太郎、太郎、荷車から魚と野菜をおろしなさい。魚はこの台の上に種類別に形よく並べなさい。野菜はきちんと積み上げて、体裁よく並べなさい」

ゆうが日よけの大きな笠をさし、太郎が魚と野菜を並べていった。

季節は初秋であったが、まだ日差しは強く魚は新鮮なうち、短時間に売らなければならなかった。ささの葉を魚の上におき、日差しが直接、当たらないように気を使わなければならなかった。

「たあ〜ちゃん、まず魚の名前を覚えてよ。これが、あゆ、おいかわ、うぐい、はや、ふな、この籠の入っているのがどじょう、うなぎ」

「さあ〜ひとつずつ、ゆくわよ、これがあゆ、言ってみて。そう。次はおいかわ、うぐい、どじょう、うなぎ」

「うまい、うまい、たあ〜ちゃんは飲み込みが早い、すごいわ！」

太郎は少こしずつ、人間の言葉を吸収し覚え始めた。

「これが、かぶ、やまいも、にんじん、じゃがいも、そして大根」

太郎は好物の「だいこん」と言って手に取り、何回もつぶやいた。

「さあ、つぎは売り方よ、こう言うのよ」「いらっしやあ、いらっしやあ、今朝取れたての魚と野菜。どれも新鮮。安いよ」

「いらっしやあ〜だけでもいいよ」

太郎は「いらっしやあ〜」と声にしてみた。何回も言っているうちに上手に声がだせるようになっていった。

町に人、村の人が太郎の奇妙な声に気づいて、だんだん人垣が出来て、魚や野菜が飛ぶように売れた。

町の衆「しげさん、こんな大きな息子がいたのか？知らなかったよ」

「ずいぶん、元気な若者じゃな。男前だし魚売りにはもったいない」

太郎はすっかり町の人気者になった。

しげ「あっ〜という間に全部さばけた。太郎のおかげじゃ。何か、ご褒美をあげないといけな
いね」

ゆう「そうね、たあ〜ちゃんは着物をもっていないので、母さん、古着を買ってあげて」

「そうだね、そうしょうね」

「さあ、店じまいとしよう。帰ったら、おっとうもきっと驚くと思うよ」

三人はあとかたづけをして、荷車に空になった籠、売り台を積み込み、古着屋のある町の中心地に向かった。そこは大店の生糸問屋、酒造問屋、呉服店、両替商が軒をつながる大路であった。荷車が堀を渡ろうとした時である。突然、太郎が引いていた荷車の手を離し引っ張り棒を下に置いた。しげとゆうびっくりして立ち止まった。

太郎が橋の反対側に飛ぶような速さで走った。しげとゆうはあけにとられて、呆然と橋の反対側をながめた。

突然、馬の大きくいなく声、どど、どど、というしずめのごう音が近づいてきた。

両替商からこの家の幼い娘がよろよろ出て、道の中央で立ち止まってしまった。

暴れ馬が疾走し、暴走、すぐ前までせまってきた。店の主人が大声をあげながら飛び出してきた。

「暴れ馬だ！暴れ馬だ！危ない！誰か娘を助けくれ！たのむ！」と怒鳴り声があがった。

その時である。疾風のように一人の若者が飛び出してきた暴れ馬に、ヒラリと飛び乗った。ど、ど、どと地面をけずる音。

危機一髪。娘をよけて馬は止まった。

娘はケガ一つなかった。

主人が飛んできた。

「娘が助かった！ 助かった。有難い。あなた様は娘の命の恩人です」

ふるえる娘を抱きながら、その家の主人は地面に手をついた。

そこえ、しげとゆうが息を切らして飛びこんできた。

「太郎、どうしたの」「何があったの～」

「たあ～ちゃん、どうして、馬なんかに、乗っているの・・・」

その家の主人が娘を抱きながら、しげとゆうの、もとにやって来た。

「私はすぐそこで、商いをいたしております、両替商の相模屋洋輔でございます。この方に娘が危ないところを、助けていただきました」

「本当にありがとうございます」「この方は娘の命の恩人です」

「どちらの、何という方ですか？」

しげとゆうは顔を見回しながら、驚いて、声もなかった。

そこえ馬の上から、ヒラリと太郎が飛びおりて、暴れ馬の手綱を道脇の水飲み場の柱に結び、ふたりの前に立った。すると、道路の真ん中を若侍と中間が真っ青になって駆けてきた。つながれている馬をみて、ポカ～ンとして座りこんだ。

両替商の相模屋洋輔が大きな声で。

「この暴れ馬はあなた様のものですか！」

若侍「 さよう、当家の馬じゃ」

「 なんと言う、ことか！、もう少しで、わたしの娘を跳ね殺すところじゃつた！」

「なんと、さようか・・・相すまぬ。許してくれ。せっしゃの落度じゃ」

「して、娘御は無事か・・・」

「 ここにいる、太郎様という御仁が、馬を止め、無事、娘を救ってくださった」

「礼を言うなら、この太郎様に申しなされ」

若侍と中間は太郎のむき方を向き変えて、正座し深ぶかく、頭を下げた。

「 危ないところを、お助けいただきまして、誠にありがとうございます。心より礼を申す。」

「せっしゃ、小田原山中藩、勘定奉行愛甲 朱里配下、愛甲 一左と申します。この度の働きを殿に言上し、必ず、改めてお礼に参上、仕る」

「どうか、よしなに、お願いいたします」

「 相模屋殿、どうか許してくだされ、このとうりでござる」

「愛甲殿、お手をあげなされ。お侍様に手をつかれたら、水に流すしかありません。」

「それに、勘定奉行愛甲 朱里様には、日頃から目にかけていただいております。お手をおあげ下され」

「しかし、どうして、馬が暴れたのですか？」

若侍「 当家の若君を乗せて、そこの辻まで来たとき、突然、二匹の犬が飛びでてきて、吠えたり、馬は驚いて、若君を振り落として疾走した」

「あっと、いう間の出来事で防ぎようがなかった」

「誠に、面目ないしだいじゃ」

若侍と中間はつながれていた馬の手綱を解き、来たほうこうにトボトボ馬を引いていった。

二人を見送りながら、しげとゆうは、太郎に話かけた。

「太郎、どうして、暴れ馬が来るとわかったの？」

「たあ～ちゃんがいきなり、走りだしたから、何が起きたのか皆目、解らなかった・・・」

「本当にびっくりして、心の臓が止まりそうだったわ」

相模屋洋輔が暴れ馬、娘を危ないところから救ってもらった、いきさつを話した。そして声をかけた。

「太郎様と申しますか。どちらからこられましたか」

しげ「はあ、ご挨拶を申しあげます。厚木村の農家、どん平の家内、しげと申します。ここにいるのが、娘のゆう、こちに立っているのが「太郎」でがざえますじゃ」

「町の市場で、相模川でとれた、魚や畑の野菜を商いにまいりました」

「太郎の商いのおかげで、もちこんだ物が全て売れ切れ、早めに店じまいして、太郎に古着などを買って帰ろうとして、こちらに通りがかったところでございます」

「はあ、さようでございましたか」

相模屋洋輔はニコニコ笑いながら。

「はあ、太郎様。いい若者でございますな」

「さあ、さ、手前どもの店は、目の前でございます。どうぞ、お立ちより下さい。太郎様に御礼を申しあげたい。どうぞ、どうぞ」

しげとゆうは、はて、どうしたものか考えたが、誘いに応じて、相模屋洋輔の後について店に入った。

さすが、大店、おおぜいの使用人、お客様がいて、ごったがえしていた。

「お客さまがたを客間に、お通ししなされ」

この店の番頭さんの案内で奥の客間にとうされた。

ゆうは、太郎が人助けをしたのを喜んだが、太郎が何か秘密みたいな何かがあるように感じていた。

「太郎さん、あなたはいったい、どこから来たの・・・」

「あなたは、誰なの・・・」と心の中でつぶやいていた。

(4へつづく)